

聖書：ローマ 9：14～23

説教題：神の怒りとあわれみ

日時：2016年1月24日（朝拝）

前回、6～13節までの箇所を「イスラエルの中のイスラエル」と題して説教させていただきました。ポイントは6節に記されていたように「イスラエルから出る者がみな、イスラエルなのではない」ということでした。民族的イスラエルの中に霊的イスラエルがある。その本当のイスラエルに救いの約束は与えられて来たのであって、そうではない肉の子どもがキリストを受け入れず、救いにあずからなくても、神の御言葉が無効になったわけではないということでした。そのことが前回、エサウとヤコブの兄弟を通して示されました。これはある意味で私たちにショックを与える御言葉です。父も同じ、母も同じ、そして双子ですから生まれた時も同じ、と条件はみな一緒なのに、片方はまことのイスラエルで、片方はそうではない。それは神の選びの計画によると言われました。そう聞くと私たちからは反論が出て来ます。パウロは福音宣教に携わる中でこのことを何度も経験して来たのでしょう。その中の二つをパウロは今日の箇所ですり上げています。

まず一つ目は14節にある通り、「それでは、どういうことになりますか。神に不正があるのですか。」ということです。同じ兄弟なのに一方を神は救いに選び、一方を滅びの中に捨て置いた。これは正義の神がしてはならないあるまじきことではないか、という問いです。それに対してパウロは「絶対にそんなことはありません」と断言します。そして15節で神がモーセに語られた言葉を引用します。「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ。」

パウロはここでこれは「正義」の問題ではなく、「あわれみ」の問題であると述べています。言い換えれば質問者の質問が間違った見地からなされている。ここに不正はないのです。これまでローマ書で見て来ましたように、すべての人は神の前に罪人であり、さばかれるべき者たちです。ですから誰かが救われなくても不正はそこにはない。反対にもし誰かが救われるなら、それはただ神のあわれみによるということです。これはマタイの福音書20章に出て来るぶどう園の労務者のたとえを思い起こしてみても分かります。ぶどう園の主人は朝早く労務者を雇いに出かけ、一日一デナリの約束をしてぶどう園にやります。その後も9時、12時、午後3時、

そして夕方5時に働く人を雇います。そして一日の終わりに全員に一デナリを渡しました。すると最初から働いていた人たちは文句を言いました。これはおかしいではないか。我々は朝早くから焼けるような暑さの中を辛抱したのだ。あなたのしていることは不正ではないか、と。しかし主人は言います。「私は何もあなたに不当なことはしていない。約束した通り、あなたに一デナリをあげたでしょ。ただ私は最後の人にも同じようにあげたいのです。」

これは私たちでもしていることでしょう。もし皆さんが誰かに何かをプレゼントした時、それを見た人がこう言ったらどうでしょうか。「なぜあなたはその人にだけ、それをあげるのか。あなたがあげたいと思う人にだけあげるのはおかしい。我々にも同じものをくれなければならない。」 そうしたら私たちは言うでしょう。「どうしてあなたにそんなことを言われなければならないの？これは私のものでしょう？私がどのように使っても私の自由でしょう。私は私があげたい人に、これをあげているだけです。」と。神も同じです。

ですから神が誰かにそのあわれみを与えなくても不正ではありません。17～18節に、出エジプト記に出て来るパロのことが述べられています。18節から分かりますように、パロは神によって頑なにされるという扱いを受けました。以前、講壇交換で他の教会に行った時、そこに集っていた方から、聖書で分からないところがあるので教えて欲しいと質問されました。それはまさにこのことでした。出エジプト記で神がパロを頑なにされたと何回も出て来ます。それなら神が悪いのではないか。神がパロをそうさせておきながら彼をさばくとは随分勝手な話ではないか。神のしていることは不正ではないか、と。しかしパウロがここで答えているように、そこに不正はないのです。ここを考える上での前提は、パロはニュートラルの状態にあるのではないということです。彼は自分の意思で神に逆らいました。彼自身、自分の心を頑なにしたという表現も何度も出て来ます。そういう彼に対するふさわしいさばきとして、神はパロの心を益々頑なにしたのです。同じ考え方は、すでにこの手紙の1章24、26、28節に出て来ました。神は自らの欲望のままに進む人々に対するさばきとして、その人を益々汚れた思いにその道に引き渡すと言われました。すなわちその道にどんどん進ませる。本人は自分のしたいように生きていると思うでしょう。しかし実はそれがすでにさばきである。もう引き返せなくなるのです。神がパロをその道へと引き渡したのは、17節にあるように、神の力を示し、

ご自身の名を全世界に告げ知らせるためです。パウロが益々頑なになったので、あの紅海の出来事が起こり、神の力が輝かしく示されました。神はそのように用いたのです。しかし私たちが確認すべきは、そこに不正はないということです。

ですから私たちは誤った土台に立って問いを發さないように注意しなければなりません。私たちは罪人であり、さばかれて当然の者たちです。驚くべきは、そういう私たちの中に救われる者たちがいることです。そしてそれはただ神のあわれみによることなのです。神はご自身のあわれもうと思う者をあわれみ、慈しもうと思う者を慈しまれるお方なのです。

さて、このように聞いて私たちは納得するでしょうか。確かに神を不正だと責めることはできないことは分かりました。しかしまだ腑に落ちないものを感じるのではないのでしょうか。私たちは思うのです。みんなさばかれるというならまだ分かる。あるいは逆にみんなが救われるのならもっと良い。しかしなぜある者が救われて、ある者は救われないのか。神は御心のままにある者をあわれみ、ある者を頑なにされると 18 節にあるが、どうしてこの違いは生じるのか。これが 19 節の問いの背後にある考えでしょう。一切のことは神の決定にかかっているのに、それで救われない者を責めるのはおかしい。誰も神の決定に逆らえないのに、という思いです。

これに対してパウロは 20 節で言います。「しかし、人よ。神に言い逆らうあなたは、いったい何ですか。形造られた者が形造った者に対して、『あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか』と言えるのでしょうか。」パウロがここで言っていることは、自分の小ささを良くわきまえよ！ということです。「人よ」という呼びかけは、その次の「神」という言葉と対比的に使われていて、人間の小ささを強調しています。そういうあなたは誰に向かって言い逆らっているのか自分で分かっているのか、というパウロの問いかけです。パウロはこれまで神がある者をあわれみ、またある者を頑なにしたのは、ただ神の意思によると述べました。私たちはそれを聞いて、「それでは答えになっていない。神がそのように意思するに至った根拠や理由をもっと我々に分かるように示せ。」と要求したくなります。しかしそのような問いは実はナンセンスなのです。カルヴァンはキリスト教綱要第三篇の中でこう言っています。「もしも、それ以上に立ち入って、『なぜ神はそのように意志したもうのか』とあなたが問い続けるならば、それは神の意志よりも大いなるもの、

神の意志よりも崇高なものを問うことであって、そのようなものは絶対に見いだされない。したがって、人は自らの無謀を抑制して、存在しないものを探ねることがないようにしなければならない。」 聖書は神の意思を究極的な根拠として示しています。ですからそれよりも上に上って、何が神をそのように意思させたのかと問うても答えはないのです。それにもし神の意思が他の何かに依存しているなら神は究極のお方ではなくなりますし、主権者でもなくなります。

これを理解できない時、私たちは自分の小ささをわきまえ知るべきなのです。21節の陶器師と粘土のたとえは旧約聖書で繰り返し使われて来たものです。これは神と私たちの間の隔たりは、陶器師と粘土の隔たりのように大きいということです。確かに聖書は一方で人間は神のかたちに造られたと言っています。そこに人間の尊厳、偉大な価値があると言っています。ただここでは神と人間の違いが、このような表現で強調されているのです。ちなみにある人はここから、神が私たちをこのように造りながら、それを滅ぼすというのは理不尽だと言いますが、これも誤解の上に成り立つ意見です。もともとこのたとえが使われているイザヤ書 29 章 16 節、45 章 9 節、64 章 8 節を見ても、神が人間を罪人に造ったというようなことは言われていません。すでに罪の状態にあるイスラエルという文脈の中で、ただ神と人との関係を示すために、このモチーフが使われています。

ですから私たちは神が示していることで私たちに分からないことがあったら、それは私の有限性によることだと思えるべきです。ある本に書いてありましたが、私たちは自然界の光の 30%しか感じ取っていないそうです。とすると他に 70%の光がそこにあるのに、私たちは認識できていない。そんな私たちが、自分に分からないからと言って、神の言うことの方がおかしいなどと言えるのでしょうか。あるいは音についてもそうです。私たちに聞き分けることのできない音を聞くことのできる動物はたくさんいます。確かにその音はそこに存在し、かつ意味を持っているのに、私たちはそれが分からない。見ることや聞くことにおいて私たちの能力がこのように限られているなら、霊的な事柄においては益々そうでしょう。そのことを思って、私たちは自分に分からないからと言って神を責めるのではなく、モーセのように聖なる地に立っていることを思って自分の靴を脱ぐべきなのです。あるいはヨブのように「私はただ口に手を当てるばかりです。私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔いています。」と言うべきなのです。そして主の前で沈黙し、今、分からないこ

とは後の日に教えてもらうことを楽しみにすれば良いのです。

しかしなぜ滅びに至る者と救われる者とがあるのかについての説明が 22～23 節に与えられています。まず 22 節に「怒りの器」のことが語られています。ここには訳の問題があります。新改訳をそのまま読むと、神は滅ぼされるべき怒りの器に怒りを示してご自分の力を知らせようと望んだが、豊かな寛容をもって忍耐して下さっていると読めます。その結果、怒りの器は滅ぼされないかのように読めます。しかしこれではこれまでの話の流れに合いません。ここで言われていることは、次のことであると思われます。すなわち神は怒りの器を、今は寛容をもって忍耐して下さっているが、それはやがてのしかるべき時に怒りを下してご自分の力を知らせようと望んでいるからということです。これは 17 節で見たパロの場合と同じです。神は怒りの器であるパロにすぐ怒りを下さず、彼を王として立て続け、やがての定めの日に大きな仕方でさばきを実行してご自身の力を示されました。ですから今、さばきを受けていなくても、それは神の怒りが一層大きく現わされる日に向かってさばきを積み上げているだけであるかもしれないのです。そしてこれはさらに 23 節の目的へとつながります。すなわち「神が栄光のためにあらかじめ用意しておられたあわれみの器に対して、その豊かな栄光を知らせるため」ということです。「光」は「闇」を背景として一層輝きます。そのように神の「救い」も「さばき」を背景とする中で一層輝き現れます。ですからかの日怒りの器に対して神が力をもって行なわれるさばきを通して、あわれみの器とされた者たちは神の栄光を一層知るので、どんなに自分たちがいただいた救いは特別であるのか、あわれみに満ちたものであるのか、この上ない仕方で示され、神の栄光がほめたたえられることになるのです。

私たちが今日の箇所を通して導かれるべきこと、それはこの神の啓示の前に静まることではないでしょうか。この真理に対して私たちが示すべき反応は、怒りや反論であってはならないのです。ここに不正はないのです。むしろあがめるべきは、神はこんな私たちから救われる者を起こして下さるとのこと。そしてそのためにキリストを遣わして下さったということです。そのキリストが今、私たちの前に差し出されていることに神の大いなるあわれみを覚えたいと思います。本来すぐにさばかれて当然の者たちに、神はこの方を差し出して下さっています。そしてこのキリストを受け取る時に私たちが聖書に従って知ることは、これは単に私の人

間的決心によることではないということです。23 節によれば、私は「あらかじめ神によって用意されたあわれみの器」であるということです。そしてどんなに大きなあわれみをいただいているかは、やがてのさばきの日に、本当の意味で知るのであります。私たちはこの神の啓示の前でへりくだり、沈黙し、神が語っておられるメッセージに聞き、受け入れたいと思います。そして神が備えておられる豊かな栄光になおあずからせていただく歩みへ導かれたいと思いますし、そのための唯一の道であるキリストを人々に一層伝える歩みに励みたいと思います。